

## 物理的複合防除による灰色かび病の発病抑制

### [研究のねらい]

エンドウの施設栽培において問題となる灰色かび病の防除に対し、胞子形成が光質に依存していることを利用した紫外線除去フィルム（UVカット）や発病門戸となる花殻（老化した感染花弁）を風で吹き飛ばすブロウ処理などの物理的防除を複合的に組み合わせた防除手法の有効性を検討します。

### [研究の成果]

- ①390nm以下の波長の光を透過しない紫外線除去フィルムをハウスの被覆資材として用いると、灰色かび病の胞子形成を抑制する効果があり、開花初期に落花殻での胞子形成が生じやすい株元部分への薬剤散布と組み合わせると、栽培期間中のハウス内の胞子飛散を低位なレベルに維持できます（図1）。
- ②さらに、ブロウ処理（写真1）で、発病門戸となる花殻を風で吹き飛ばすと、発病部から上部が枯死するため被害が大きい托葉や茎での発病が著しく抑制されます（図2）。

### [成果の活用面・留意点]

- ①灰色かび病は好湿性病害のため、紫外線除去フィルムは防霧加工のものを使い、換気は開口率4%を限度に十分に行い、低湿度管理に努めましょう。
- ②植物体のぬれは発病を助長するため、ハウス天井部からの結露水の落下がないか施設構造を点検しましょう。



写真1 ブロウ処理

電動ブロウ（風圧520Ap、風量2.7%o/分）を用い、うね沿いに約7m/minで移動しながら、筒先を茎葉から約50cm離して、草冠部から株元まで風による花殻の吹き飛ばしをおこなう。

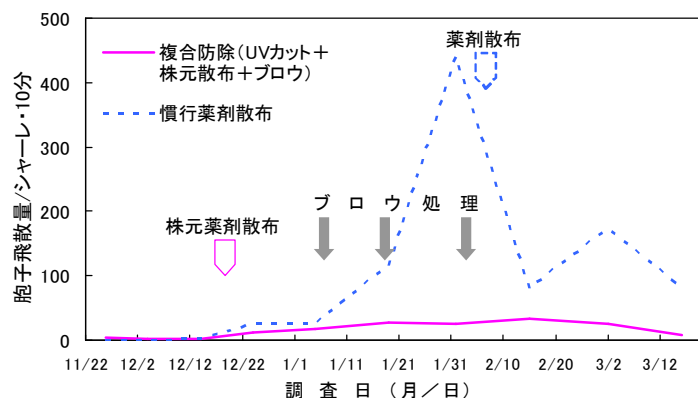


図1 複合防除が灰色かび病菌の胞子飛散に及ぼす影響

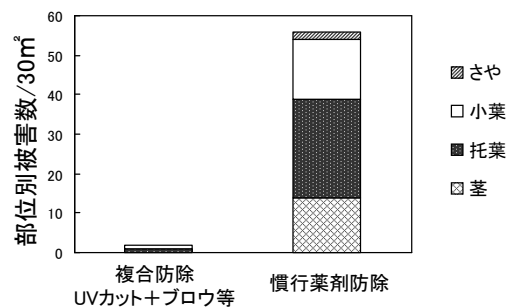


図2 複合防除がエンドウ灰色かび病の発病に及ぼす影響

実施年度：平成2～4年

担当者：増田吉彦・前田和也・家村浩海